

# 小学生の書く力を高め、書くことに自信をもつための指導 －日常的な作文指導と短時間完結型作文指導を通して－

大場 浩正\*・甫 仮 南欧美\*\*

(平成30年3月26日受付；平成30年5月17日受理)

## 要 旨

多くの小学生たちは、書く内容が見つけれない、書き方が分からないことにより、書くことが嫌いと言っている。このような実態から、児童の書く力を高めるために、書き方を適切に指導し、児童に書くことへの抵抗感を払拭させる必要がある。本実践の目的は、児童の書く力を高め、児童が書くことへの自信をもつ実践の効果を示すことである。主な実践は2つである。「日常的な作文指導」と「短時間完結型作文指導」である。これらの実践を通して、児童の変容を明らかにする。特に、実践では書くことへの自信をもつために、次の4つことを大事にし、指導を行った。1つ目は、必ず最後まで作文を完成し、達成感を味わえるようにしたことである。2つ目は、書く度にたくさん褒めたことである。特に書けなかった児童が少しでも書けるようになったとき、一文を短くして分かりやすい文章を書けたときには、必ず褒めた。3つ目は、書いた作文をペアや全体の前で発表し、友達からメッセージをもらうことで、「書いてよかった」「聞いてもらってうれしい」という実感を積み重ねるようにした。4つ目は、学級だよりに児童が書いた作文をたくさん載せて紹介した。これらのことにより、児童たちは、文章を書くことが好きになった。そして、書くことへの抵抗感が少なくなり、書くことに自信をもつようになった。

## KEY WORDS

primary school children 小学生, writing 書くこと, daily composition instruction 日常的な作文指導, confidence 自信, a feeling of accomplishment 達成感, a feeling of resistance 抵抗感

## 1 はじめに

小学校の国語の授業において、児童が最も困難であると感じているものは「書くこと」である。児童が、ある教材に取り組むとき、程度の差はあるものの、ほぼ全員が「読むこと」はできる。また、ある出来事の感想を聞くと、程度の差はあるものの、ほぼ全員が「話すこと」はできる。しかし、書くことになると、必ずしもそうとは限らない。自分の考えや思いをうまくまとめられずに、なかなか書き出せない児童が必ずいるものである。では、どうして児童は書くことを難しく感じているのだろうか。その理由として、多くの児童たちは「書く内容が見つけれない、書き方が分からない」のであり、「書くことが嫌い」と言っている。このような実態から、児童の書く力を高めるために、まず児童に書くことへの抵抗感を払拭させる必要があるのではないか。そして、書き方を適切に指導するなど、実際に書けるようになる指導を行う必要があるだろう。

一方、現行の「小学校学習指導要領解説国語編」(文部科学省, 2008)の第4章「指導計画の作成と内容の取扱い」における「B書くこと」に関する事項では、「第5学年及び第6学年は年間55単位時間程度を配当すること。その際、実際に文章を書く活動をなるべく多くすること」(p. 126)と定めている。しかし、筆者自身を含め、多くの教師は、児童に年間55時間相当も文章を書く活動を行っていないのが実態ではないだろうか。これは、教科書教材のほとんどにおいて、年間指導時数50時間は確保しているものの、その中身は、取材や構成に関する指導、推敲に関する指導、および発表に関する指導を含めて50時間である。そのため児童が実際に書く時間は少なくなる。この点に関して、野口(2005: 182-183)は、以下のように述べている。

歩くように、呼吸をするように、負担なく、構えることなく、文章が書けるためにはどうすればよいのか。そのことに応えて私は、児童たちに次のように言う。とにかく文章をいっぱい書くことが大切。文章を書く力は、要するにいっぱい書かせることによって伸びるのである。

つまり、書く力を高めるには書く量を保障し、書くことの習慣化を図ることの重要性を指摘している。

そこで本実践研究では、児童の書く力を高め、書くことへの自信をもたせる実践の効果を探ることを目的とした。主たる実践は二つである。一つは「日常的な作文指導」であり、もう一つは「短時間完結型作文指導」である。これらの実践を通して、児童の変容を明らかにする。

## 2 教育実践

### 2.1 実践課題

本実践研究の課題は、以下の通りである。

年間を通して、「日常的な作文指導」と「短時間完結型作文指導」の実践を繰り返し行うことにより、児童の書く力が高まり、書くことへの自信がつかか。

### 2.2 実践の対象者

対象とする児童は、小規模小学校の5年生、男子7名、女子4名、計11名であった。

### 2.3 実践の内容

#### 2.3.1 日常的な作文指導

主に帰りの会の10分間でその日の振り返り作文を書いた。岩瀬・ちよん（2014, 2017）が提唱する「振り返りジャーナル」を参考にして実践を行った。手順とルールは以下の通りであった。

- ① 大学ノートを半分の大きさに切る。
- ② 1日1ページと決める。
- ③ 毎日「〇〇先生へ」と必ず書き、相手意識を持つ。
- ④ 毎日、テーマを設定する。
- ⑤ 帰りの会に10分で書く。
- ⑥ 人を傷つけることは書かない。
- ⑦ 誤字、脱字があっても細かく訂正しない（それは教科のノートで行う）。
- ⑧ 書いた人から持ってきてもらい、サッと読んでポジティブなメッセージを一言だけ返す。
- ⑨ 赤ペンで線を引き、ポジティブな一言を書く（ネガティブなことは書かない）。
- ⑩ 家には持ち帰ることはしない。

「振り返りジャーナル」は担任と児童をつなぐ交換ノートでもある（図1参照）。4月の始業式からほぼ毎日書き続けた。帰りの会の10分間は、鉛筆の音だけが聞こえ、書くことに集中する時間が流れた。

書くことに抵抗がある児童にとって、大きな障害となるのは、「伝えたい、書きたい」と思う材料がないことである。そこで、毎日テーマを設定することにした（表1参照）。多くの児童たちが毎日200字程度書けるようになった。少ない児童でも、100字程度書くようになった。

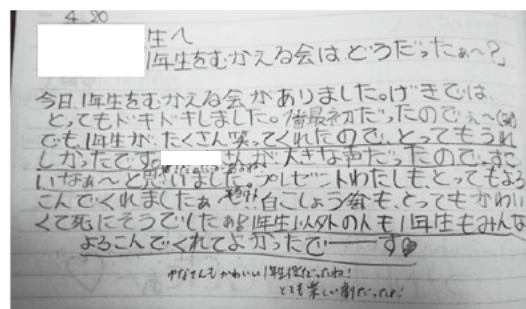


図1 実際の振り返りジャーナル

表1 振り返りジャーナルのテーマ

- |                        |                    |
|------------------------|--------------------|
| ・どんな先生になってほしいですか？      | ・クラス目標決定！感想をどうぞ！   |
| ・〇〇の授業、どうだった？          | ・今日の〇〇、どうだった？      |
| ・体育大会でがんばったことと成長したことは？ | ・なんでもOK 自由に書こう など。 |

1学期は72日間あったが、振り返りジャーナルを実施したのは、70日間だった。時間にすると、10分×70日で700分（11時間40分）であった。小学校学習指導要領解説国語編において、年間55単位時間程度と定められている中で、1学期の間に振り返りジャーナルだけで5分の1をクリアできた計算となる。

表2 抽出児童（3名）の半年間の変容

	4月初旬	7月末	9月末
児童A	63字	131字	135字
児童B	145字	163字	204字
児童C	187字	230字	249字

半年間継続した結果、表2のように児童の書く量が増えていった（3名を抽出）。児童Aはクラスの中で一番書くことに苦手意識をもっている児童であった。1学期当初は、「え〜ジャーナル書くの〜。」と書くことに抵抗感を感じている様子であった。なかなか書き出せないときには、児童Aのそばへ行き、「今日の〇〇のときどう思った。」と質問し、書く内容を促すようにした。その後、「〇〇と書いてごらん。」と、書き方を教えた。児童Aだけではなく、時には全体指導で書き出しの言葉を教えることもあった。そして、書くことに慣れ、少しずつ書けるようになってきたとき、すかさず褒めるようにした。学級だよりでも書いた作文を紹介した。すると、児童Aは、「だんだん書けるようになってきた。」と自信をもつようになった。児童Aの振り返りジャーナルの変容は以下の通りであった。

＜児童Aの作文＞

4月11日 〇〇先生へ

お花見集会をふり返って

お花見集会をふり返ってたのしかったのは、きまったはんでかいものです。さいしょはさむいからとんじるをかったらとてもあたたかくてとてもおいしかったです。つぎからあげをかったら2こおまけでくれました。あとりんごあめもかいました。おいしかったです。今日はとてもたのしかったです。(135字)

＜児童Aの作文＞

7月20日 〇〇先生へ

1学期心にのこっていることベスト3

ぼくが心にのこっていることベスト1は、7月の学校にとまろうです。つづいてベスト2は、5月の体育大会です。さいごベスト3は、6月の救命コンテストです。学校にとまろうでは、きもだめしが1ばんたのしかったです。体育大会では、白ぐみがかててうれしかったです。救命コンテストでは、しょうがもらえるかなと思ったけどもらえなかったのがざんねんです。これでベスト3のはっぴょうをおわります。(187字)

## 2. 3. 2 短時間完結型作文指導

### (1) 実践1 スケッチ作文〜詳しく書くということ〜（5月2日(月)実施）

以下のように指示を出した後、表3の評価基準を児童に示した。

これから、私がすることをよく見ていてください。そして、私がやったことをできるだけ詳しく文章にしてみてください。できるだけ詳しくです。

表3 評価基準

AAA . . . . . 中学以上の作文力	AA . . . . . 小6レベルの作文力
A . . . . . 小5から小4レベルの作文力	B . . . . . 小4から小3レベルの作文力
C . . . . . 小1レベルの作文力	

その後、筆者は以下のように行動した。

- ① 教室の真ん中に立ち、「これから始めます」と始まりの合図を告げる。
- ② ニコニコ笑って、手を振りながら教室をいったん出ていく。
- ③ 廊下からドアを3回ノックする。そして教室に入る。

- ④ ニコニコしながら、ゆっくりと大股で教室を一周する。
- ⑤ もう1回教室を出て、窓を開ける。
- ⑥ 外を眺めて窓を閉める。
- ⑦ 「今日はいい天気だなあ。こんなに晴れていたらいいのにな。」とつぶやく。
- ⑧ ゆっくり教室中央に戻り、「はい、そこまでです」と言う。そして、「ポン!」と手をたたいて終わりの合図を告げる。

この①から⑧までの動きは、時間にすると1分くらいであった。たった1分のこの動きをできるだけ詳しく書くというのが、この時間の目標であった。

早速、児童は書く作業に取り掛かった。なかなか思い出して書けなかった子もいた。そのような子は「C」の評価になった。以下のような作文は「A」の評価となった。なぜなら、「時間の順序を押さえて書いていること」と「会話や音を落とさずに書いていること」の2つの条件をふまえて書いているからである。

〇〇先生が教室を出ていく。すぐに教室にもどってくる。手をふる。その後、教室を1周した。1周した後、まどの近くに行って外を見た。そして、まどをあけてもう一度外を見て、「今日はいい天気だなあ。こんなに晴れていたらいいのにな。」と言ってから教室に入ってきた。そして、スタートの位置に戻って終了。

次に、筆者は、児童の作文が予想以上によくできていたのを褒めた後、以下のような「AAA」になるための秘訣を教えた。

- ・一文を短く。だらだらと長く書かない。「。」1つで、500円の価値がある。
- ・10個あれば、5,000円の価値のある文章が書けたということである。動きを連続で見ない。区切る。
- ・音と会話を聞きもらさない。
- ・見たことに対して自分の考えを書く。

さらに、もう一度同じような動きをし、2回目の作文を書いてもらった。今度は、児童たちの視線が1回目とは全く違った。筆者の動きを見終わった児童たちは、一斉に書き始めた。全員がとてもよく集中し、鉛筆の音だけが聞こえてきた。2回目の作文を書き終えた児童には、再びノートを見てもらうように指示をした。どの子も1回目よりも詳しく書けており、ほとんどの作文が「AA」や「AAA」になった。学年が変わって早い時期に、一文を短く書いたり詳しく書いたりする指導を行ったことで、文章を長々と書いていた子も短くて分かりやすい文章を書くようになっていった。以下に、児童Dの作文を紹介する。児童Dは自分の考えをたくさん入れて、ちょっとした変化も見逃さずに書いていた。学級だよりでもこの作文を紹介し、大いに褒めた。

#### <児童Dの作文>

EちゃんとFくんの位置から、手をたたいて始めました。みんなの様子を見ながら歩いていました。ドアの近くで手をふりました。それからろう下に出ました。教室のドアを「トントントントン」と4回ノックをしてから教室に入りました。教室に入ったら、大またで歩きました。先生が、先生の机にぶつかってしまいました。先生は、「いてっ」と言いました。私は、「だいじょうぶかなあ」と思いました。教室を出る近くで、大またから小またになりました。教室を出て、ろう下に出ました。まどをあけて、外を見ていました。「うん」とうなずいて見えていました。私は、「なんで、うんとうなずいたのかな」と思いました。まどのかぎを閉めて教室に入りました。先生は、「気持ちのいい天気だなあ」と言いました。私も心の中で、そうだなあと思いました。

#### (2) 実践2 その他の短時間完結型作文指導の実践例

スケッチ作文は1時間でできる作文指導である。国語の授業の中で児童の書く力を高めるには、1時間で指導し、実際に書いてもらい、評価できる活動をたくさん蓄積する必要がある。そのために、これまでに以下のような短時間完結型作文指導を行ってきた。

- ① 4コマ漫画作文：起承転結の4コマ漫画の絵に合うように文章を作る。
- ② おもしろ説明文：5年教科書教材「生命のかて・塩」の書き方を模倣して説明文を作る。
- ③ 一字題一行詩：漢字一字の題名に対して一行の短い詩を作る。
- ④ 変身作文：視点を変えて文章を作る。ニュースキャスター風、コギャル風、気取ったお母さん風など。

## (3) 実践3 ホワイトボード対話型作文(その1)

ホワイトボード対話型作文は、児童同士の良好なコミュニケーションを育んだり、自己表現することを楽しんだり、友達がどう考えているのかを理解したりする目的で行った。進め方は、以下の通りであった。

- ① A4のホワイトボードを1人1枚用意する。
- ② ペアになり、じゃんけんをして勝った児童が相手に3分間質問する。
- ③ 相手が話したことを聴きながらホワイトボードに書く。
- ④ 3分経ったら、聴いて書いたことを相手に対して読み上げる。
- ⑤ もう一方の児童も同様にして行う。

話す題材は、「土日は何をして過ごした。」「〇〇の本の読み聞かせ、どうだった。」「〇〇の行事はどうだった。」「1学期に自分が成長したことは。」などであった。実際には、以下のように対話しながら取り組んだ。進め方はホワイトボード・ミーティング®(ちよん, 2015)を採用し、繰り返し練習をした。

児童F：ゴールデンウィークはどうだった。

児童G：暇だった。

児童F：というと。

児童G：とにかく暇だった。何もなかった。

児童F：もう少し詳しく教えてください。

児童G：家で勉強して、ゴロゴロして、おやつ食べて、テレビ見て、それからゲームもしたよ。

児童F：エピソードを教えてください。

児童G：風で自転車が倒れて、直しに外に行ったんだけどね、そのあとはまたずっと家にいたよ。勉強して、ゴロゴロして、おやつ食べて、テレビ見て、ゲームして...、3連休ずっとこの繰り返しだったよ。

これを週に1~2回のペースで繰り返し行ってきた。すると、3分間で、A4のホワイトボードいっぱいを書けるようになってきた。友達と対話しながら書くことを楽しんでいる様子がたくさん見られた。

## (4) 実践4 ホワイトボード対話型作文(その2)

筆者の前任校では、1学期と2学期に読書旬間を行っていた。その取組の一つとして、全校で行う「おすすめの本の紹介」があった。その期間に読んだ本の中で一番おもしろいと思ったものを一人一人が紹介した。その紹介文を書く指導を行った。以下の活動は、ホワイトボード対話型作文(その1)を発展させた、本格的な作文指導であった。

- ① 教師が選んだ本の読み聞かせをする。
  - ② 教師が書いた「おすすめの本の紹介文」を提示し、見通しを持つ。
  - ③ 児童がおすすめの本を選ぶ。
  - ④ ペアでおすすめの本について対話する。
  - ⑤ 書き出しや構成を教える。
  - ⑥ ホワイトボードや構成表を見ながら原稿用紙に書く。
  - ⑦ 清書する。
  - ⑧ おすすめの本を紹介してもらう。
- (①~③で1時間、④~⑦で1時間、⑧で1時間)

図2は、実際に児童Hが聴きながら書いたホワイトボードである。「どんな本を選んだのか」「なぜ選んだのか」「本のPR」の3つが入った作文になるように指導した。実際には、以下のように対話しながら取り組んだ。

児童Hと児童Aの対話

児童H(黒で記述)：おすすめの本というところ。

児童A：じごくのそうべえです。

児童H：というと？

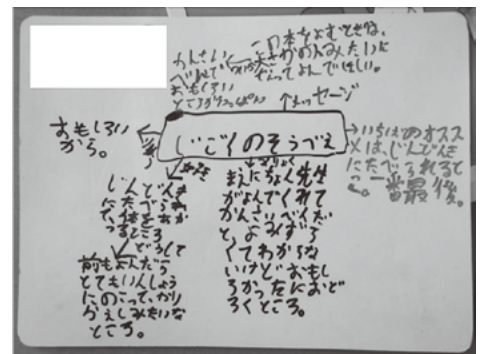


図2 児童Hのホワイトボード

児童A：前に、ちよん先生が読んでくれて、関西弁だから読みづらくて分からなかったんだけど、〇〇先生が読んでくれたらおもしろかったから。

児童H：もう少し詳しく教えてください。

児童A：じんどんきに食べられて、体を操るところがおもしろい。

児童H（赤で記述）：一番のおすすめのページは。

児童A：じんどんきに食べられるところです。

児童H（青で記述）：みんなへのメッセージをお願いします。

児童A：この本を読むときには、関西弁でおもしろいところがたくさんあるから、大阪の人みたいになって読んでほしいです。

ペアでの対話後は相手に書いてもらったホワイトボードを見ながら、作文を書いていった。「黒・赤・青の順番で書いてみましょう」と指示しただけで書ける児童もいるが、なかなか書き始められない児童もいる。そこで、作文の構成表を拡大したものを提示した（図3参照）。この方法で、全員が原稿用紙1枚分書くことができた。以下は、クラスの中で、一番書くことに苦手意識をもっていた児童Aが書いたおすすめの本の紹介文である。

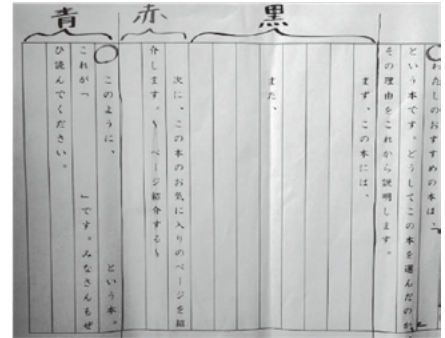


図3 作文の構成表

#### <児童Aの作文>

ぼくのおすすめの本は、「じごくのそうべえ」という本です。どうしてこの本を選んだのか、その理由を説明します。

まず、この本にはだいたいのおおりの、そうべえというつながりしがあります。あるとき、そうべえがつなわりしていると、バランスがくずれて1回死んでしまったら、じごくへ行ってしまう。ちよん先生がきたとき読んでもらいました。かんさいべんでわかりにくかったけど、ちよん先生が読んでくれたら、本当のかんさいべんで、おもしろかったです。

次に、この本のおすすめのところをしょうかいします。それは、じんどんきの体に入ってイジツたところです。大阪の人みたいに読んでください。

今回は、読書旬間で全校児童がおすすめの本を紹介したため、A4の用紙に絵と文でまとめて掲示した。出来上がった紹介文を書いて終わりにするだけでなく、実際に本を紹介してもらった。そうすることで、推敲指導に重きを置かなくても、児童自らねじれた文章や誤字脱字に気付くことができた。自ら気づくことが言語発達に大変重要である。

同様の方法で、「親子活動～学校に泊まろう～レポート」と「自然教室の振り返りレポート」も書いた。ホワイトボード対話型作文の活動も短時間で終わることができる。実際に児童が書いたのは1時間であった。また、この他にも以下のような利点がある。

- ・ホワイトボードマーカーは簡単に消すことができるので、気軽に書くことができる。
- ・ペアで対話しながら相手のことを書くので、抵抗感が少なくなる。
- ・繰り返し行うことで、話すことに慣れ、また、聴き取った内容を詳しく正確に書けるようになる。
- ・友達の話の聴き合い、承認し合う関係が育まれる。

豊かなコミュニケーションは、決して自然発生するものではない。日常から意図的にコミュニケーション活動を取り入れていくことが大切である。たとえ短い時間でも日頃から多くの人と話しをすることは重要である。そのことが聞き合う、学びあう関係につながっていくだろう。

### 3 成果と課題

これまでの実践の成果を把握するために、9月末に児童11名全員にアンケート調査を行った。アンケート項目と結果は表4の通りである。

表4 アンケート調査の結果（人数と％）

	とてもそう 思う	まあまあ そう思う	あまり 思わない
1. 4月よりも作文を書くのが好きになった。	9 (81.8)	2 (18.2)	0 (0.0)
2. 4月よりも作文を書ける量が増えた。	10 (91.0)	1 (9.0)	0 (0.0)
3. 国語の作文授業は楽しい。	10 (91.0)	1 (9.0)	0 (0.0)
4. ホワイトボードで対話後に作文を書くとき書きやすい。	11 (100.0)	0 (0.0)	0 (0.0)

表4の結果からも分かるように、児童たちは、文章を書くことが好きになっていった。書くことへの抵抗感が少なくなり、書くことに自信をもつように成長した。

本実践研究では、小学生の書く力を高めるために、書く時間を保障し、書くことを習慣化することを目指した。本稿では、半年間の実践の内容と成果を報告したが、年間を通して実践を継続すると、「振り返りジャーナル」だけでも約30時間は確保することができる。また、短時間完結型作文指導では、半年間で7つの実践を行った。1年間継続することで年間15時間は確保できる。その他、教科書教材を使用すれば、書く活動に年間55時間は十分に確保することができる。

また、書くことに対する自信を持つために、次の4つを大事にして指導した。

- ① 必ず最後まで作文を完成させ、達成感を味わえるようにした。
- ② 書く度にたくさん褒めた。特に書けなかった児童が少しでも書けるようになったときや、一文を短くして分かりやすい文章を書けたときに必ず褒めた。
- ③ 書いた作文をペアや全体の前で発表し、友達からメッセージをもらうことで、「書いてよかった」「聞いてもらってうれしい」という実感を積み重ねるようにした。
- ④ 学級だよりに児童が書いた作文をたくさん載せて、紹介した。国語の時間に楽しい短作文を書いたとき、行事後の振り返りで作文を書いたときは、必ず学級だよりに掲載してクラスの全員の前で読み聞かせしてきた。

実践における上記4つ手立てが書くことへの自信につながったのだと考える。

本実践研究では、児童の書く力がどのように高まり、自信をもつようになるのかを4つの具体例を示し、明らかにした。しかし、実践はまだ途中の段階である。今後も継続して実践進めて、1年間が終わった段階で、どの児童も振り返りジャーナルで200字程度の文章を書くことを目指したい。また、どのように書いたらよいかを指導し、さらに内容の濃い文章を書けるような手立ても模索していきたい。

### 引用・参考文献

- 岩瀬直樹・ちょんせいこ（2014）『よくわかる学級ファシリテーション①かわりスキル編』解放出版社  
 岩瀬直樹・ちょんせいこ（2017）『振り返りジャーナルで子どもとつながるクラス運営』ナツメ社  
 ちょんせいこ（2015）『ちょんせいこのホワイトボード・ミーティング』小学館  
 宇佐美寛（1979）『論理的思考—論説文の読み書きにおいて—』メヂカルフレンド社  
 野口芳宏（2005）『児童は授業で鍛える』明治図書  
 向山洋一（2001）『児童の知性を引き出す作文の書かせ方』（教え方のプロ・向山洋一全集22）明治図書  
 文部科学省（2008）『小学校学習指導要領解説 国語編』文部科学省

# Teaching methods to improve primary school children's writing ability and to increase their confidence in writing

-Through daily composition and short-term completion type compositions-

Hiromasa OHBA\* · Naomi HOKARI\*\*

## ABSTRACT

Many primary school children state that they dislike writing because they cannot think of what to write and cannot know the way to write. For such situations, we need to instruct a method appropriately to improve their writing ability, and it will be necessary to let a child eradicate feelings of resistance to writing. The purpose of this practical study is to show the effects of the practice that makes primary school children have confidence in writing, and therefore foster their writing ability. We have two main practices: "Daily composition instruction" and "Short-time completion type composition instruction." Through these teaching practices, we can clarify the children's improvement. Especially, we regarded the following four approaches as important to give them confidence in writing. First, we encouraged the children to complete compositions to the end and have a feeling of accomplishment. Second, we gave them much praise whenever they wrote. In particular, we praised those children who were not able to write but became able to write short and understandable sentences. Third, they presented what they wrote in a pair or in front of the whole class, and they received feedback from friends. Therefore, they accumulated feelings such as "I am happy to write." and "I am glad you listened to me." Finally, we introduced many of the children's compositions in "Class News." Through this, they came to like writing. As a result, their feeling of resistance to writing decreased, and they came to have confidence in writing.